

幼稚園教諭の Belief に関する研究

— 小学校教員との比較から —

佐藤 智恵・七木田 敦

(2007年10月4日受理)

Research on Kindergarten Teacher's Belief System

Chie Sato and Atsushi Nanakida

Abstract. The aim of this study is to clarify the structure of teacher's belief system in kindergarten. The questionnaire was adopted as a method for this research. It consists of sixty-eight questions. Consequently, 104 responses were collected from kindergarten teachers. The data were analyzed from three aspects; their ages, lengths of their career, and qualifications. The following are the main results. 1) Kindergarten teacher's Belief is different depending on the age. 2) Kindergarten teacher's Belief is changed by the experience. 3) Kindergarten teacher's Belief was different according to their acquired qualification. Namely, Belief is different in those who acquire the nursery teacher qualification and those who acquire the teacher of the elementary school.

Key words : kindergarten teacher, Belief system, questionnaire survey

キーワード : 幼稚園教諭, Belief system, アンケート調査

1. はじめに

保育者はどのような子ども観、保育観、信念などを持って日々の保育を行っているのだろうか。担任している幼児を、元気な子どもと考えるか、それとも落ち着きのない子どもと考えるか、保育者の捉え方によって、子どもに対する保育行動は変化することが考えられる。このことから保育者のもつ子ども観・保育観は、子どもに大きな影響力を与えるといえよう。

Belief は心理学や社会心理学の中で使用されてきた言葉である。Karl E. Scheibe (1970) は心理学の立場から、「行動の手引き書である」と述べ、西田 (1998) は、社会心理学の立場から「ある対象と他の対象、概念、属性との関係によって形成された認知内容」とであると定義した。また Albert Ellis が提唱する論理療法の中では、出来事の「受け取り方」のことであるとしている (國分, 1999)。Belief には、「そうあらねばならない」と強く思うものから「どうあってもいい」という執着のないものまでである (西田, 1998)。

森・植田・大元・西田・湯川 (1986) は、保育観や

子ども観、指導観、イデオロギー、またその背景となる人間観などを総称して、保育者の Belief と呼んだ。保育者の Belief や保育観・子ども観などについての研究は、1980年～90年代にかけて幾つか行われている (赤塚ら1981, 森ら1985, 森ら1986, 藤崎ら1985・藤崎ら1986, 邨橋ら1989, 中1996)。その多くは質問紙法により調査された。森ら (1986) は経験年数と保育への意欲・指導タイプと保育者の Belief の関係について、邨橋ら (1989) は幼稚園教諭用の保育観尺度を作成し、教諭のもつ保育観について、保育者の支配的態度、生活態度・秩序の管理・強制、子どもの主体的行動の容認などの6因子を抽出した。観察の手法を用い保育者の保育観と保育行動を明らかにした研究には、赤塚ら (1981) が保育者の行動特性が「子どもの自立的働きかけの受容」「子どもの依存的働きかけの受容」「与える形式の話し方に比べて求める形式の話しが多い」など7つに分類できること、森ら (1985) が3人の保育者に共通する5つのイデオロギーの共通要素 (個人の尊重、子どもの活動意欲や集中力を養うこと、遊びを継続・発展させるために興味関心をもたせることな

ど)があったこと、を報告している。

教師を対象とした Belief 研究では、河村 (2000)、羽鳥ら (2003)、内田 (2003)、小谷 (2005)、河村ら (2004) により教師の Belief が明らかにされてきた。方法としては、引用した全ての先行研究が、河村 (1995) が作成した「教師特有の Belief 尺度」を用いてアンケート調査を実施していた。その結果、教師の Belief の特徴として、「ねばならない」「～べきである」と定義されるイラショナル・ビリーフ (irrational belief) が示されており、イラショナル・ビリーフ以外の Belief に触れたものはなかった。

先行研究の結果からは、保育者側の Belief には、「子どもの主体的行動の容認」「個人の尊重」「興味関心を持たせること」などの結果がみられ、「～ねばならない」という教師特有の Belief とは異なっていることが予想される。しかし、先行研究では、それぞれの調査方法が異なるために、保育者と教師の Belief を比較することができない。そこで、本研究では、河村 (1995) の尺度を用いて、小学校教諭と同様のアンケート調査を幼稚園教諭を対象に実施し、小学校教諭の Belief との比較を行うとともに、幼稚園教諭の Belief を明らかにする。

2. 方法

(1) アンケートの作成

アンケートの作成は、河村 (1995) の作成した「教師特有のビリーフ尺度」を幼稚園教諭用に修正、作成した。作成したアンケートを表 1 に示す。河村 (1995) が明らかにした小学校教諭のもつ Belief の結果と比較するために、修正は最小限にとどめながらも、「学習内容」を「保育の内容」に、「学習成績」を「活動」にするなど、幼児教育に携わる保育者が回答を行う際に、違和感を覚えないような表現方法に留意した。項目数は 68 項目、5 件法 (5 : とてもあてはまる, 4 : だいたいあてはまる, 3 : どちらともいえない, 2 : あまりあてはまらない, 1 : 全くあてはまらない) にて回答を求めた。また回答者の属性と Belief との関係を明らかにするために、年齢、経験年数、資格について記入欄を設けた。

(2) 対象者と依頼方法

対象者は、Y 県、T 県の私立、公立幼稚園に勤務する幼稚園教諭 137 名である。依頼方法は、研修会においてアンケート用紙を配布し、終了時に回収を求める、または園を通して依頼を行い、園ごとにアンケート用紙を郵送し、同封の封筒にて返信を求めた。調査は、2007 年 7 月～9 月にかけて実施した。回収数は 104 部、

回収率は 75.9% であった。

3. 結果と考察

(1) 回答者の属性

回答者の年齢 (図 1)、経験年数 (図 2)、幼稚園免許以外に取得している資格 (図 3) に関して、以下に示す。

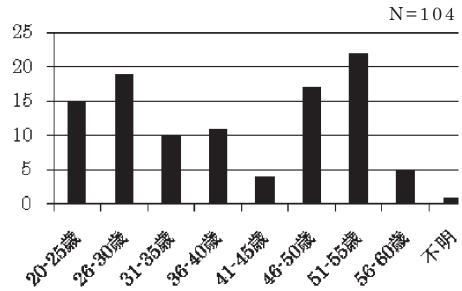


図 1 回答者の年齢

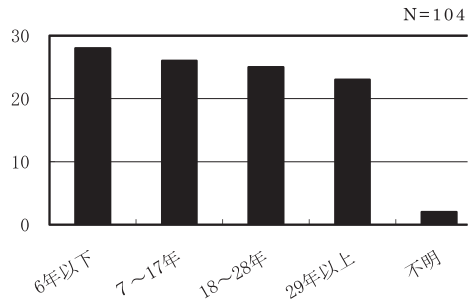


図 2 回答者の経験年数の内訳

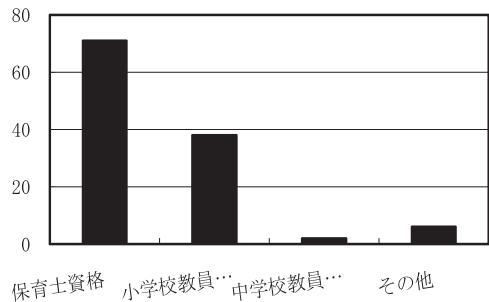


図 3 幼稚園免許以外に取得している資格

(2) 幼稚園教諭特有の Belief について

幼稚園教諭特有の Belief を明らかにするために、河村 (2000) の方法に倣い、68 項目の項目ごとの平均値を算出し、全尺度得点の平均値 (3.51) とそれぞれに t 検定を行った。その結果、有意 ($p < .01$) に得点の高かった 26 項目を抽出した (表 2)。

表2 幼稚園教諭に強く見られた Belief

項目	平均値	標準偏差	項目	平均値	標準偏差
68	4.77	0.627	65	4.28	0.857
67	4.71	0.649	5	4.25	0.826
57	4.63	0.727	64	4.24	0.747
53	4.60	0.690	44	4.09	0.837
62	4.58	0.748	43	3.98	0.935
7	4.53	0.574	12	3.92	0.932
41	4.51	0.884	27	3.89	0.858
45	4.45	0.858	28	3.89	0.749
56	4.36	0.812	20	3.82	0.845
1	4.33	0.660	31	3.81	1.034
49	4.32	0.754	38	3.81	0.976
23	4.30	1.214	3	3.78	0.812
54	4.29	0.784	60	3.78	0.824

1) 幼稚園教諭特有の Belief について

分析の結果、幼稚園教諭は保育職についていることへの喜びややりがいを感じているものが多いことが明らかになった。また、担任クラスの幼児に対して強い責任感を感じているものや、よりよい保育方法を身につけることを重要と考えているものが多いことから、幼稚園教諭という自らの仕事に誇りと喜びを感じ、取り組む姿勢が伺える。しかし、そのことが逆に「職業」という意識を薄め、「保育者の仕事に範囲はなく、勤務時間外でも必要があればしなければならない」という Belief にもつながっていることが考えられる。「担任している子どものために」という思いが強く、真面目で熱心に取り組むあまり、勤務時間外にも保育の準備や書類作成などを行い、その結果として、保育職にやりがいや喜びを感じながらも、常に多忙で疲労感を感じている保育者が多いことが考えられる。幼児に希求する Belief には、明るく元気で、協調性があり、しっかりと言葉や態度で示せることを望む傾向がみられた。これは、理想的とされる幼児像であり、また園の保育方針等にも使用されている言葉であることから、妥当な結果であるといえるだろう。しかし、実際の保育現場では幼児の様相は多様であり、本研究で使用したアンケート項目では記載できなかったものがあることが予想される。実際の保育現場で見られる幼児の多様な姿について、幼稚園教諭がどのように感じ、対応しているのかについて今回の調査では明らかに出来なかった。

2) 小学校教諭特有の Belief との比較

河村（2000）が報告した小学校教諭特有の Belief は全28項目であった。幼稚園教諭に強くみられた26項目中、22項目は小学校教諭の結果と一致した。幼稚園教諭のみにみられたものは、項目3、12、20、56の4項目であった。幼稚園教諭のみにみられた Belief で最も特徴的な点は、「～でなければならない」というイラショナル・ベリーフが含まれていなかったことである。このことから、小学校教諭よりも幼稚園教諭の方が緩やかな Belief を持っていることが考えられる。また、実践においてはさまざまなタイプの保育者がいるということからは、幼児教育には学齢期以降の指導要領にあたるものがなく、それぞれの保育者のやり方で、保育を行っていることが考えられる。しかし、かといって自身の思うように保育を展開していくことが可能なわけではなく、項目3にあがったように、同僚との同一步調をとることも重視されている。保育職には、園という組織の中で同僚との足並みをそろえながら、自分自身で考え、保育をしていく姿勢が求められていることが伺える。また保育技術よりも人間性を重視している保育者が多いことが挙げられた。人間性という各人によって目指すものが異なるものは、主観的な部分に依ることが大きく、何をもちて人間性が高いという評価を行うのが、明確ではない。そのために自分自身の保育の評価を行いにくく、自己肯定感の低下や不安感などにつながるものが考えられる。

小学校教諭のみにみられた項目には、項目29、58、51、55、21、47が挙げられる。これらの内容は「厳しさ」、「効率性」、「児童への毅然とした態度」などを求めるものである。ゆったりと子どもを待ったり、安らぎの場であろうとする幼稚園教諭の Belief にあてはまらなかったのは、当然の結果といえよう。

(3) Belief と幼稚園教諭の属性の関連について

河村（2000）による先行研究の小学校教諭の結果では、各属性と Belief について有意な差は認められなかったことが報告されている。幼稚園教諭の Belief と3つの属性（年齢、経験年数、取得している免許）との関係を検討するため、一要因の分散分析を行った。

1) 年齢と Belief について

年齢では、以下の4項目に関して有意な差が見られた。【項目10 ($F(3, 101) = 3.28, p < .05$)、項目15 ($F(3, 101) = 3.57, p < .05$)、項目23 ($F(3, 101) = 3.35, p < .05$)、項目38 ($F(3, 101) = 4.11, p < .01$)】抽出された各項目の平均値を表3に示す。

項目10では、20代と40代・50代に、30代と40代との間に有意な差がみられた。項目15では、20代と40代、

表3 年齢による Belief アンケートの平均値

	20代	30代	40代	50代
項目10	3.24	3.19	2.67	2.58
項目15	3.82	4.05	3.30	3.44
項目23	4.06	4.24	3.95	4.89
項目38	3.88	3.90	3.19	4.11

30代と40代・50代の間に有意差が見られた。このことから、この2つの項目は、20代と30代の幼稚園教諭特有の Belief であることがわかった。年齢が若い保育者ほど幼児への対応を平等に行うべきだと考えていることは、若い保育者の幼児に対する公平な姿勢と捉えることもできる。しかし、これは40代・50代の保育者が、個々の子どもにあわせた関わりを行っていることの現れであるとも考えられる。保育者は、多くの保育経験や自分自身の子育てなど人生経験を経ることで、定形ではない関わりの必要性を感じていることが示唆された。項目23は、50代と20代・40代の間に有意差がみられ、50代の幼稚園教諭の特有の Belief であること、項目38は40代の結果が他の3つの年代と比較して、いずれも有意に低いことから、40代の幼稚園教諭はあまり強く感じていないことがわかった。この2項目も先の項目と同様、自身の子育てなどを通した自らの経験から出た回答であろう。また、この年代は、園長や主任など園の保育全体を管理する立場となり、家庭からこのような要望を聞くことが多くなることも1つの要因だと考えられる。

2) 経験年数と Belief について

経験年数では、以下の5項目において有意な差がみられた。【項目10 ($F(3, 101) = 3.45, p < .05$)、項目14 ($F(3, 101) = 2.71, p < .05$)、項目15 ($F(3, 101) = 3.99, p < .05$)、項目25 ($F(3, 101) = 3.48, p < .05$)、項目61 ($F(3, 101) = 5.38, p < .01$)】抽出された各項目の平均値を表4に示す。

項目10・14はともに、6年以下と29年以上、7-17年と29年以上の間に有意差がみられ、29年以上の経験年数の教諭にはみられない Belief であることがわかった。項目15は、6年以下と18-28年・29年以上との間

表4 経験年数による Belief アンケートの平均値

	6年 以下	7年- 17年	18年- 28年	29年 以上
項目10	3.19	3.18	2.96	2.42
項目14	2.58	2.68	2.44	2.04
項目15	3.88	3.96	3.30	3.39
項目25	2.12	2.57	2.80	2.54
項目61	3.19	2.43	2.92	2.92

に、また7-17年と18-28年・29年以上との間に有意な差があり、経験年数18年以下の幼稚園教諭特有の Belief であることがわかった。項目25は、6年以下と7-17年・18-28年の間に有意差がみられた経験年数6年以下のものはいずれの項目でも高い値であった。これらの項目からは、経験年数の少ない保育者ほど、「～するべきだ」という Belief を多く持っていることが明らかになった。そして様々な保育経験を基に、次第に、多くの Belief の中から自分なりの Belief を構築していることが考えられる。項目61は、7-17年と他の3つの経験年数(6年以下、18-28年、29年以上)の間に有意差がみられた。「保育者の力量は経験年数にほぼ比例する」というこの項目は、保育経験7-17年の保育者にはみられない Belief であった。このことから、新任といわれる時代には経験年数を積むことで力量が形成されると考えており、経験を積んだ18年以上の保育者は、自身の経験が保育の力量へと結びついていると考えていることが示唆された。新任の時代を過ぎた保育者が、経験年数と力量が無関係であると考えているのは興味深い。10-20年近くの経験を積んだこの時期の保育者は、園内において中堅、ベテラン層として、様々なことを任せられる立場である。無我夢中であったそれまでから、自分や周りの保育者のやり方を客観的に見られる時期に入る。それまでの先輩保育者の保育に追随していくやり方から、自分の保育の方法を確立していく中で、先輩・後輩保育者の保育を見て、経験年数に関係なくよい保育をしているものを認められる時期であると考えられる。

河村(2000)の先行研究では、小学校教諭の Belief に年齢や経験年数での差は見られなかったが、幼稚園教諭では有意な差が見られた。幼稚園教諭は、経験によって自らの Belief を変化させていることが分かった。これは、保育活動が保育者自らの経験や人生と深く結びついていることの表れだと思われる。

3) 資格と Belief について

幼稚園教諭が取得している幼稚園教員免許以外の資格(保育士資格、小学校教員免許)について分析を行った。回答では、中学校教員免許(2名)、介護士、栄養士などその他(6名)もいたが、少数のため分析からは除外した。この属性に関しては、保育士資格と小学校教員免許の2つであったために、 t 検定により分析を行った。その結果、以下の8項目に関して、有意な差が認められた。保育士資格を持っている幼稚園教諭には、項目41 ($df = 101, t = .95, p < .01$)、項目45 ($df = 102, t = 1.97, p < .01$)、項目56 ($df = 102, t = 1.50, p < .05$)、項目62 ($df = 101, t = 1.20, p < .05$)、項目67 ($df = 102, t = 1.13, p < .05$) が強い Belief としてみられ、小学校教

員免許を持っている幼稚園教諭は、項目7 (df=101, $t = -1.25, p < .05$), 項目16 (df=101, $t = -.53, p < .05$), 項目29 (df=102, $t = -1.09, p < .01$) の3項目が強い Belief であることがわかった。

資格と Belief に関しては、幼児教育と学校教育それぞれの持つ Belief を明らかにする結果となったと思われる。幼稚園教員免許に併せて保育士資格を持ったものは、明るく元気な子どもとの間に信頼感を持つことを大切に考え、やりがいのある保育職という仕事を園全体で同じ方針で取り組むことを大切にしているのに対し、幼稚園教員免許に小学校教員免許を併せて持ったものは、子どもに指導を素直に聞く態度を求め、指導書を参考にして、継続的に保育を進めることを大切だとしている。保育士資格を有する幼稚園教諭のもつ Belief はあくまでも理想を求めているのに対し、小学校教員免許を持つ幼稚園教諭のそれは現実的なものを求めている。このことから、同じ幼稚園教諭の中でも、取得している資格によって、異なる Belief を持っていることが示唆された。

5. おわりに

幼稚園教諭の持つ Belief を明らかにし、先行研究で明らかになった小学校教諭の Belief との比較を行った結果、おおむね同様の Belief を持っていることが明らかになった。しかし、細かな部分では、「小学校教諭特有の Belief との比較」または「資格と Belief について」で示したとおり全く異なっており、今後、より詳細にみていく必要があると思われる。近年、幼児教育と学校教育が連携をとることの重要性が言われ、スムーズに連携を行うための様々な工夫が行われている(佐々木, 2004, 河崎・吉田・北谷・藤本・権部・浅田, 2004)。しかし、実態としては連携に費やす時間がない、幼稚園から多数の小学校へ分散するためすべての学校と連携をとることが困難などという理由で、連携を取ることが困難とされている。しかし、それだけでなく、本研究で明らかになった幼稚園教諭と小学校教員の Belief の差も1つの要因ではないかと考える。今後、幼児教育と学校教育、それぞれの現場で持っている Belief の差を考慮することで、よりスムーズな幼小連携を行える可能性があることが示唆された。

また、あらかじめ質問項目が決まっていた本研究の方法では、幼稚園教諭それぞれの細かな保育観、Belief まで明らかにするには限界があった。返信されたアンケート用紙の回答欄に「年齢によって違う」「子どもによって異なる」「幼稚園教諭としては答えにくい部分もあった」との意見が記入されていた。このこ

とは、このアンケート項目では自分自身の Belief を表せない、という幼稚園教諭の思いがあり、別の Belief が存在することが推測される。今回は幼稚園教諭のもつ Belief について、おおまかな傾向を知ることができた。しかし本来 Belief とは、より個人的であり、細かな Belief の気づきや理解は、自分の保育を深める1つの材料になると思われる。より詳細な Belief についての検討が今後の課題である。

【引用文献】

- 赤塚徳郎 森本 大元千種 福井敏雄 (1981) 保育者の行動特性と幼児の集団行動との関連. 広島大学教育学部紀要, 第1部, 30, 143-152.
- 藤崎真知代 熊谷真弓 藤永保 (1985) 保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅰ. 発達研究, 1, 23-39.
- 藤崎真知代 熊谷真弓 藤永保 (1986) 保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅱ. 発達研究, 2, 17-58.
- 羽鳥健司 小玉正博 (2003) 教師のイラショナル・ビリーフとバーンアウトの関連. 教育相談研究 41, 13-19.
- Karl E. Scheibe (1970) Beliefs and Values Holt, Rinehart and Winston, inc.
- 河村夏代 鈴木啓嗣 岩井圭司 (2003) 中学校教師の「ビリーフ」に関する研究—母親と比較して—. 発達心理臨床研, 9, 79-85.
- 河村茂雄 (1995) 教師特有のビリーフと児童の学級適応についての考察. 日本教育審理学会第37回総会発表論文集, 535.
- 河村茂雄 (2000) 教師特有のビリーフが児童に与える影響. 風間書房
- 河崎道夫 吉田京子 北谷正子 藤本尚 権部良子 浅田美知子 (2004) 幼小連携接続問題の実践的研究報告その2—児童間交流の恒常化の取り組み—. 三重大学教育実践総合センター紀要, 24, 145-154.
- 國分康孝 (1999) 論理療法の理論と実際. 國分康孝編 誠信書房
- 小谷正登 (2005) 保健室利用に関する教師の意識と学校協働化との関係—「10年経験者研修」参加者のビリーフに注目して—. 教職教員研究センター紀要(関西学院大学), 10, 33-45.
- 森本 植田ひとみ 大元千種 西田忠男 (1986) 保育者の指導意識の比較—経験・意欲・指導タイプ別考察—. 幼年教育年報, 11, 13-23.
- 森本 植田ひとみ・大元千種・西田忠男・湯川秀樹 (1986) 保育者の指導意識の比較—経験・意欲・指導タイプ別考察—. 幼年教育研究年報, 11, 13-23.

郵橋雅広・鍛冶則世・浅川潔司・横川和章 (1989) 幼稚園教諭の保育観に関する研究 (1). 日本保育学会大会発表論文抄録, (42), 722-723.

中 俊博 (1996) 保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較からみた—, 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 129-141.

西田公昭 (1998) 「信じるこころ」の科学 マインドコントロールと Belief システムの社会心理学, セレ

クシオン社会心理学18, 安藤清志 松井豊 編 サイエンス社.

佐々木見 (2004) 幼小連携データベースの開発. 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 1, 69-76.

内田利広 石橋浩和 (2003) 中学生の教師に対する自己開示に及ぼす教師特有のピリーフの研究—学級担任による生徒理解のあり方についての一考察—. 京都教育大学紀要, 130, 129-141.

表1 Belief アンケート質問項目

1. 保育者は担任したクラスの幼児の、活動・生活を含めたすべてを把握する必要がある
2. クラスのきまりがゆるむと、クラス全体の規律がなくなるので、保育者は毅然とした指導が必要である
3. 保育者は幼児教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である
4. 保育者は幼児のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある
5. 保育者は保育の内容を、幼児間の能力差に配慮して、クラス集団全体が向上するように指導する必要がある
6. 保育者は幼児の活動・行事などの意欲を刺激するために、幼児間で競争意識をもたせることは、ある程度必要である
7. 幼児の生活の指導は、幼児教育全体の場で、適宜、継続的に行う必要がある
8. 保育者はその指示によって、クラスの幼児に規律ある行動をさせる必要がある
9. 保育者は保育活動において、自分の知識が不確かな場合に、それを幼児に知られることは教育上好ましいことではない
10. 保育者は担任するクラスの幼児すべてに、平等に行う事ができない対応を、一部の幼児にするべきではない
11. クラスの問題は、担任する保育者の力で、なるべく解決すべきである
12. 保育者は、担任するすべての幼児から、慕われるのが望ましい
13. 保育者は保育の内容に関係のない、自分の個人的な興味・体験などを、幼児に話すべきではない
14. 保育者は幼児に、自由あそび中でもなれなれしすぎる態度・言葉使いはさせるべきではない
15. 保育者は、地域や幼稚園で認められた模範的な活動を、日々の保育に生かすべきである
16. 保育者は、年間の保育の進め方の大枠は、指導書を参考にすべきである
17. 保育者は、親に見せる幼児の客観的な評価を取り入れることが必要である
18. 保育理論の専門書を読んでも、直接保育実践にプラスになることは少ない
19. 保育理論などを引用して物を言う保育者は、実践力の伴わない保育者が多い
20. 保育者にとって、保育実践上一番大事なものは、保育技術よりも保育者の人間性である
21. 幼児の活動は努力に左右されることが多いので、保育者は幼児に、努力の大切さを教えるべきである
22. 幼児は行事とあそびとを、気持ちの切り替えをしっかりと、テキパキとこなさなければならない
23. 幼児は幼稚園生活を通して、集団のきまり・社会のきまりを、身につけなければならない
24. 幼児は、どの保育者の言うことも、素直に聞くべきである
25. 忘れ物の多い幼児は、意欲に欠ける幼児が多い
26. 幼児は自分だけが伸びる・進むことを考えるのではなく、クラスの友達全体を考えて行動すべきである
27. 幼児は幼稚園で、自分から進んで活動に、参加する態度が望ましい
28. 幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい
29. 幼児は担任の保育者の指導を、素直に聞く態度が必要である
30. 幼児は年齢別での活動では、クラス活動時以上の、規律ある行動をする必要がある
31. 幼児は幼稚園からの手紙などは、しっかり保護者に届けなければならない
32. 幼児は、幼稚園生活上で大事なことは、まず担任の保育者に話すべきである
33. 幼児は幼稚園では、担任の保育者を親代わりの存在として、接することが大事である
34. 幼児は保育者の家庭のことなどを、ねほりはほり聞くものではない
35. 幼児は保育者に対して、面と向かって、愛称やニックネームで呼ぶべきではない
36. 幼児は保育活動中に、挙手の仕方・発言の仕方など、規律のある態度が必要である
37. 幼児は保育活動中、保育者の指示どおりに行うことが必要である

38.	幼児は思ったこと・考えたことは、しっかり発言したり、態度や行動で示すことが必要である
39.	保育者の指導に素直に従う心がけが、幼児にとって大きな教育効果が生まれる
40.	問題のある幼児、難しいクラスは、ベテランの保育者が担当することが必要である
41.	幼児は明るく元気に、幼稚園生活を送ることが大事である
42.	活動の達成が低い幼児には、努力不足の幼児が多い
43.	保育者の仕事に範囲はなく、勤務時間外でも、必要があればしなければならない
44.	幼児が園やクラスのまきりを守る努力をすることは、社会性の育成につながる
45.	生活の指導などでは、園の保育者全体が、同じ方針で取り組むことが大事である
46.	人の心は見えないので、幼児は態度、行動で、自分の心を示すことが必要である
47.	クラス運営は、クラス集団の全体の向上が基本である
48.	年間の保育計画などの内容は、年度内で残さず教えるべきである
49.	保育者は園の保育方針・日々の保育活動を、保護者会などを通して、保護者に説明することが大事である
50.	保育者は園では、一人の人間としての行動よりも、保育者としての行動が大事である
51.	幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である
52.	クラス運営上、他の保育者から批難や指摘をされないようなクラス運営をすべきである
53.	担任するクラスに対する保育者の責任は、とても大きい
54.	保育に対する保育者の熱意は、必ず幼児に伝わるものである
55.	保育者と幼児は、親しき中にも、毅然たる一線を保つべきである
56.	保育者には、各人それぞれの保育者としてのタイプがある
57.	園内研修などで、よりよい保育の方法を追及し、身につけることは、保育活動が続ける上で、とても大事である
58.	保育者は、教えなければならない内容が多いので、効率的な保育の方法を身につける必要がある
59.	運動会、発表会、作品展などでは、幼児の規律ある行動と、日々の保育の成果を見せる必要がある
60.	保育の理論よりも、実践に基づいた経験が、保育を行う際の一番の力になる
61.	保育者の力量は、保育経験年数に、ほぼ比例する
62.	幼児と保育者の信頼関係の上に、よい教育活動が実現する
63.	幼児の活動の成果は、その能力よりも、努力の質と量に関係が大きい
64.	保育職は、社会と文化、人間の未来に直接関わる、公共的使命のある職業である
65.	保育職は、社会的に価値のある仕事である
66.	保育者は、少なくとも幼稚園では、聖職者の役割を期待されている
67.	保育職は、やりがいのある職業である
68.	保育職は、幼児に接する喜びのある仕事である